私の一冊

真理を追求する勇気

自伝的戦後史

羽仁五郎著

中井直正

大学生の時に生協の本屋でふと目にした羽仁五郎の「続・都市の論理」に興味を持ち、それからいくつか読むようになった。どの本だったか「真理は少数にある。少数から議論するにしたがって多数になる」という言葉は、その後の私の天文学や宇宙物理学の研究にも大いに役立った。何か新しい考えや今までにない計画を提案すると必ず反対されるか無視されたものであるが、そのたびにこの言葉を思い出したものである。

今回挙げた1冊は著者の体験を通して戦後の日本の政治、社会、大学などを語ったものである。今日本人のほとんどは戦争反対を唱えていてそれは良いのだけれども、本当に大切で偉いのは、羽仁五郎や石橋湛山のように、戦争をする前に戦争に反対することである。

本書は戦前の知識人の状況、治安維持法で獄中にいた戦中、8日15日に学生を率いて新しい政府を作ろうとしたが、監獄から出られずに唯一の機会を失ったことなどから始まっている。戦後のところは教員組合創立の秘話、日本学術会議の創設、参議院議員としての活動、学生運動との関わりなど具体的な事実を通して日本の政治と社会を述べているが、学問とは何か、大学とは何か、教育とは何かについても鋭く突っ込んでいる。いろいろ複雑な経緯から設立された本学の学生には、とりわけ必読の書であろう。

昨年生誕100周年であった、東京教育大学の朝永振一郎さんは「ふしぎだと思うこと、これが科学の芽です」と言った。これは自然科学だけではなく、人文科学や社会科学にも共通することである。しかるに東京教育大学時代の学生自治会を廃止し、大学新聞も教員の指導下においた本学は朝永さんの考えと相容れるだろうか。我々は朝永さんを大学の宣伝に使うだけではなく、朝永さんが大事だと言っていたことを学内で実現するように努めることが大切ではなかろうか。

学生諸君には、大学のこれまでの経緯はともあれ、「なぜだろう、不思議だな」と思って物事の本質を洞察し、真理を追求し、勇気を振り絞ってあるべき姿を目指さんことを願い、本書を推薦したい。

（スペース伽耶・2625円）

（物理専攻・教授）

筑波大学新聞（第 265 号）　（2007 年 11 月 12 日発行）